



Title	<書評>Peter Tracey Connor, "Georges Bataille and The Mysticism of Sin", The Johns Hopkins University Press, 2000
Author(s)	島田, 陽祐
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 169-173
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51228
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈書評〉

Peter Tracey Connor

Georges Bataille and The Mysticism of Sin

The Johns Hopkins University Press, 2000

島田 陽祐

はじめに—本書の構成と背景

本書評はジョルジュ・バタイユの思想総体を神秘主義思想という観点から論じた *Georges Bataille and The Mysticism of Sin* を扱う。筆者ピーター・トレイシー・コナーはアメリカのコロンビア大学にて教鞭を執る現代フランス思想の研究者である。コナーはバタイユの最後の著作『エロスの涙』や、バタイユの共同体思想に関するジャン＝リュック・ナンシーの論考『無為の共同体』の英訳に携わり、英語圏におけるバタイユ研究を牽引する研究者であるといえる。

2000年にジョン・ホプキンス大学出版から発行された本書は近年の英語圏におけるバタイユ研究の傾向が色濃く現れている。英語圏におけるバタイユ受容は1982年から始まるミシェル・リッチマンらの先駆的な研究から、その後多くの論考や英訳がなされてはいる。しかし、コナーは、このバタイユ研究の現状を、未だバタイユの思想の正確な起源を知る事無しにフーコー、バルト、クリステヴァ、デリダ、ボードリヤールらの二次的文献の読解からバタイユという巨大な闇を窺い知るに留まっている、と評する(本書pp.14-15)。近年の英語圏のバタイユ研究はこの遅延状態に起因して神秘主義という観点からバタイユの思索の特異性と思想形成を見いだそうという試みが多く見受けられる。本書における議論は、このような傾向を引継ぎ、また精査する事によりバタイユの神秘主義への偏向を前景化しその必然性と可能性を提案している。

まず、『内的体験』におけるバタイユ自身の記述から神秘主義思想が重要な役割を担っているということを確認しておこう。バタイユによれば、「内的体験(*expérience intérieure*)」は「いかなる信仰告白にも縛られず、またそこに源泉を持つこともないような体験」¹⁾である、と留保を設けてはいるが、「内的体験とは、神秘的体験(*expérience mystique*)と呼ばれているもの、すなわち、恍惚の、法悦の、少なくとも沈思のもたらす感動の状態を意味するものである」²⁾。確かにバタイユは自身の提示する体験と神秘的体験の差異を再三述べ、自身の思想と神秘主義との間に明確な距離が設けているのは確かである。しかしバタイユの著作群を通して神秘主義を仄めかす記述や中世の神秘家達への参照が示す様にバタイユの思想と神秘主義は常に関係を保ち続けている。したがって、この両者の関係に、バタイユの思想に通底する核があると考えるのは有効だ。だが一方で、このバタイユの神秘主義への偏向が様々なバタイユ批判を生産してきたことは看過できない。コナーは最たる例であるサルトルの「新しい神秘家」から三つの批判点を

抽出し、そこからバタイユと神秘主義との連関を通してどのようなアプローチを取るかが新たなバタイユ像を描く試金石になると考えている。第一章「神秘主義的先駆者」ではバタイユの企ての中心におかれる主体の情動性に、第二章「言語的困難」では哲学的術語と神秘主義的仄めかしの混成する特異なテキスト実践に、第三章「神秘主義と倫理性」ではバタイユの思想における倫理の問題について言及している。

本書評では、まず第一章でみられるバタイユの神秘主義についての思想形成とサルトルのバタイユ批判を検討し、二章、三章で展開される問題系へと敷衍したい。というのも、コナーの章立てはサルトルの批判にそれぞれ応答するものとなっており、その批判を提示することが本書の意義を明らかにする糸口となると考えられるからである。

「新しい神秘家」における三つの批判

『内的体験』は1943年、サルトルの著書『存在と無』の刊行と同年に出版された。サルトルはその反応として、即座に『内的体験』の評論「新しい神秘家」を発表している。コナーはサルトルの対応を、バタイユの記述における「現存在」や「共同存在」、「超越」、「内在」、とりわけ「無」という用語が哲学的語彙の盗用であり、その思索がサルトルの標榜することになる実存主義の、あるいは『存在と無』の末尾に告知された倫理に関する研究の妨げになる、という意識から批判の対象に挙げたと指摘している。「神秘家」という言葉はこの辛辣な書評において、日常的に使われる意味と同時に、哲学とバタイユの神秘主義的傾向との間に距離を設ける為の侮蔑の言葉として用いられている。

一つ目の批判は体験と推論の、すなわち身体的情動性と理性的認識の一致点を模索するバタイユの裸性に向けられる。サルトルにとって思考と身体とは厳密に境界付けられるべきものであり、バタイユの試みは「砂浜に寝て日光浴をする快楽と同様にたいした価値のないものである」（本書、p. 35）。『内的体験』におけるバタイユの記述はヘーゲルの体系やデカルトのコギトにまで向けられるが、そこに並べられるのは身体の露出である。バタイユ自身、「沈思の方法」において「私はまるでひとりの娼婦がドレスを脱ぐ様にしてものを考える。運動の極点においては、思考は破廉恥だ、猥褻そのものだ」³⁾と思考を身体の露出に準えて表現しているように、穏当な批判であるだろう。

二つ目は哲学的語彙の恣意的な使用の問題である。個人的体験に根ざした告白において、哲学的な概念を付与された術語を使用することは、厳密な思考であるような外見を見せはするが、いざその内実を探ろうとするや否や意味は消失し、情緒、あるいは惑乱のみが残される。つまり哲学的語彙の使用は正当な意味において為されるべきである、というものだ。

三つ目はバタイユの方法としての「沈思 (contemplation)」とその倫理の問題である。サルトルにとって、バタイユの思想の欠陥は「近代哲学が観照的なままにとどまったと信じたこと」（本書、p. 33）であり、そのような「沈思」は政治的、倫理的要請から離れ、個人的な救済程度の意義しかなかった。バタイユの思索は、今ある世界から、個人の個人的な内奥への後退を意味し、道徳的行為の基礎となる理性の拒否であり、論理的帰結を一顧だにしない体験の称賛と解釈されるものであった。

以上のような批判に対し、バタイユの議論の妥当性は、神秘主義的傾向を取り去ることで維持しようと

考えられてきた（本書, p. 9）。これに対し、コナーは、「神秘的体験」に向かう思想を援用し、また、そこから乗り越えた点にバタイユの意義を見いだす。それでは以下でこの三つの批判に対するコナーの返答をみていきたい。

神秘主義への偏向とその必然性、可能性

サルトルの第一の批判は身体の情動性と理性的認識の一致点において展開されるバタイユの特有の思考法についてであった。コナーはこの批判をプラトンに遡る精神と物質の区分から根強く残る問題であると考へ、バタイユの特有の思考法にロシア人哲学者レフ・シェストフの親炙を指摘しつつ神秘主義の伝統を概観する（本書, pp. 28-30）。

プラトンは『第七書簡』において精神が別の世界に参入する契機として、意識のより高い形態「知の飛び火」を記述している。プラトンにとって「知の飛び火」とは対象に対立する知というとは異なる物自体の把握であった。その後新プラトン派プロティノスによる『エネアデス』では「直知」として提示されることになる。理性とは異なる思考様式の最終段階として体験の最中で得られる意識である。このプロティノスによる体験における直知と、理性による知解との分岐はそれ以後の神秘主義の伝統、体験の優位を決定づけるものとなった。例えば、偽ディオニュシオスは『神名論』において、体験は「知的活動の内的な停止」であり、体験そのものが啓示であることを示している。ここに理性的能力による営みである哲学と、意識の超感覚的な様態を体験において見いだす神秘主義思想の決定的な分離が見て取れる。

しかし、コナーによると、バタイユの試みは神秘的体験におけるような身体的情動の優位を唱えるものではない。バタイユの思想が単純な直観の優位や理性批判であると考えれば、神秘家という誹りは免れないが、コナーの議論に沿うと、バタイユの体験概念を探る上での要諦は、バタイユの意図する体験とは思考と身体との接点への回帰であると解釈することにある（本書, pp. 34-35）。『内的体験』において主題化される状態、それは能得の限りに、蓋然性に条件付けられた線の思考を押し進め、その限界を認識し、理性的操作である思考と情動的身体性の境界を、過剰な意味の消尽によって侵犯する「極点」を指している。そのためバタイユの試みは、合一の体験を語る神秘主義であると同時に哲学的思考をも要求するものである。コナーはこの観点から第二、第三の批判を検討する。

二つ目の批判は哲学の語彙と神秘主義的灰めかしの混淆する記述に向けられたものであった。コナーはこの批判を、バタイユが体験を書くという行為に担わせた戦略を看過するものであったと考へる。本来、神秘家達の語る体験とは、沈黙の内に完結する思考の体験である。体験そのものと体験を語ることの差異から、神秘家達の記述は常に体験の豊かさから逸脱するという問題を含んでいる。それは「知的活動の内的な停止」である体験を語ることは、それ自体が認識の整合性への試みによって体験を「言語的隷従性」へと回収することを意味し、体験そのものが変質するからである。

バタイユも同様にその体験のもたらす交感の伝達の為に言葉を探すことに駆られ、不断の言語の圧力に反して意味のもつ重みから言葉を解放しようとする。それが『内的体験』におけるバタイユのテキスト実践であった。この混淆された記述は術語の厳格な限定的使用に依る概念の実体化から滑走し「異議提起

(contestation) が絶え間なく続き非-知へと思考を形成する。バタイユはこの企てを「企てによって企ての領域から脱出すること」⁴⁾と定義しているように、語りから語り自体を破壊し、語りから逸れ出るものを表す。それはサルトルの述べる「哲学用語の全燔祭(holocaust of philosophical words)」を意図してもたらず戦略にほかならない。このようなバタイユの意図を踏まえれば『内的体験』における難解な文章の必要性を捉えることは可能である。

第三に倫理の問題である。バタイユにとって倫理の問題は、その射程を図るのが困難な問題である。というのもバタイユは晩年のマルグリット・デュラスとの対話において、自身の探求の最大の障害を「他人の存在をみとめてこれを完全に尊重しなければならないという必要性」であると考えていたからである。他者の存在を前提とするということは、なぜ体験を追求することを妨げるのであろうか。このバタイユの言明は他者に対する責任に従属するということによって生じる義務の問題を提起している(本書, p. 96)。

コナーはこの点に注目しバタイユとシモーヌ・ヴェイユの革命における見解の差異を提示している。ヴェイユにとっての革命は秩序や義務によって行為の帰結に配慮するものである。一方バタイユにとってのそれは、革命の意味や、政治的活動の意義すらも排するものである。バタイユにとって倫理は法秩序や義務を理性的に練り上げることによりもたらされるものではない。

コナーはヴェイユの『根を持つこと』に対する書評からバタイユの倫理を浮き彫りにする。(本書, p. 78)バタイユが強調するのは倫理の理解不可能性である。すべての倫理の根幹に人間的な存在の特権的な尊厳があり、それは至高の現前性、内密性として与えられている。しかし、それは自分の諸限界が超出されるのを感じながらでしか把握できないものである。コナーは、理性が自分の尺度に還元できないものである体験において倫理の示すものを、バタイユ「罪」という観念から明らかにしようと試みている(本書, p. 123)。バタイユの体験において、絶え間ない過剰な異議提起は概念化された有用な世界を攪乱させることによって「交感」をもたらす。この過剰な運動において自己を賭けに投じることによって開かれる可能事の極限は、それ自体がバタイユの想定するあらゆる倫理の基盤となる。バタイユにとって「悪」は諸存在の境界の侵犯である。そしてこの「悪」の運動に参加するものが、この運動そのものの「罪」を介し「交感」をもつのである。コナーは、バタイユを、この体験の追求という意味において、神秘思想の実践者であると位置づけている。だが、体験の性質上、バタイユが何らかの立場をとろうとしなかった曖昧さから、サルトルやヴェイユの形成しようとした人間性や新たな目的と相容れぬものとなった。バタイユの思索は立場を提示するという企てそのものの否定するものである。これまでの神秘的体験が恍惚によってもたらされる神との「交感(communiation)」を意図していたのに対し、バタイユの体験とは象徴的な神の殺害を意味し、その「罪」を介して交感もたらされるという、超越者や、超越者に依拠する企てそのものの供犠を意味する。つまり、バタイユの提示する体験は、何らかの基準や審級の無い過剰な「悪」の運動が暴力的衝動へと転化する可能性を秘めている。

コナーの議論は、敢えてバタイユの暴力性を重要視する。バタイユは戦争をある種の「供犠」として、つまり現代を特徴づける世界における体験の契機として捉えている。宗教的な契機を失った世界において、暴力を賛美する危険性を孕んでいると考えられる。しかし、コナーは、バタイユは戦争ではなく、それが

導く恍惚の実践を求めていたと捉えることによって先の危険性を退けている。戦争が導く恍惚の実践というバタイユの神秘主義的側面は擬似的な死の演劇化という機能を果たし、体験における運動を押し進めるエネルギーが戦争の暴力を暴力的で無為な歓喜へと昇華させる（本書, p. 159）。コナーはバタイユの体験を、そして体験を語ることを暴力の無力化のプロセスであると評価している。

おわりに

本書におけるコナーの議論はサルトルの批判をあまりにも単純化しているくらいはあるが、神秘主義という批判の核となる部分を積極的に肯定することにより従来のバタイユ研究において一般的であった哲学の枠組みにそった読解では捉えることのできなかつた新しい視座を提供している。本書で論じられた「神秘主義」を援用した「内的体験」を確認すると、本質として、理性や意味が情動によってその強度は保ったまま無力なものに転化させるシステムとして機能していることがわかる。この強度を保った暴力性を産出するシステムをバタイユの共同体構想に接続させることによって、「沈思」を内的な供犠として捉えることが可能となり、また宗教性の失われつつある現代社会においてバタイユの供犠を基盤とした共同体論の応用可能性が見いだせるのではないだろうか。

註

- 1) *O.C.*, V, p. 15. なお、バタイユのテキストからの引用は (*Euvres complètes*, Paris, Gallimard, 1970-1988, t.I~XII. に依り、略号 *O.C.* で示す。
- 2) *Ibid.*, p. 15.
- 3) *Ibid.*, p. 200.
- 4) *Ibid.*, p. 60.

